

まことの礼拝

聖日の朝に、ときどき経験することですが、集会での礼拝が、礼拝でなくなっていることがあります。「礼拝」でなくて、「祈り会」になっているのです。礼拝においては、「自分のために」、また「人のために」祈る必要はありません。礼拝の中心はあくまで十字架の上で犠牲になり、私たちの代わりに死んでくださった「イエス様」であるべきなのです。イエス様の犠牲について、またイエス様の愛について思いをひそめ、へりくだって心から祈ると、集会中が感謝でいっぱいになり、喜びがわきあがってきます。ですが、どなたかが自分のことを声高に祈っても、人のことについて祈っても、イエス様だけを中心に祈ったときのような喜びは、わいてこないでしょう。また、祈りの中に説教、個人的な体験、考えなどが入っていることも、決して適切ではありません。礼拝の祈りとは、あくまで主イエス様だけに向かって捧げられるべきです。十字架の救いのみわざをなし遂げてくださったイエス様、よみがえられて今も神の右の座について支配しておられるイエス様、近いうちに来てくださるイエス様への感謝と賛美だけが、礼拝の中心であるべきです。

ですから賛美の歌も、イエス様の十字架のすくいのみわざをたたえる歌、主の全能の力とご栄光をたたえる歌、また再臨を待ち望む歌を選ぶべきなのです。救われるための招きの歌は、礼拝のときには適当とは言えません。さいわい「日々の歌」には、礼拝にふさわしい歌がいっぱいあるので、それらの中から賛美するようにしましょう。

次に、集会の座席についてですが、礼拝のテーブルには年配の、尊敬されている兄弟がたが着くべきです。

「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである。」ということばは真実です。ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。

——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。——また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。また、教会外の人々にも評半の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。執事もまたこういう人でなければなりません。謹厳で二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利をむさぼらず、きよい良心をもって信仰の奥義を保っている人です。(1 テモテ 3・1～9)

聖餐についても、ときどき安易にながれているのを見ることがあります。バン裂きとはただ皿の上に、手早くバンを千切って並べればよい、といったものでは決してありません。ぶどう液の扱いも同様です。年配の兄弟がイエス様がなさったことをしのびながら、パンを裂き、ぶどう液を注ぐ

べきなのです。では主イエス様がどのようになされたのか聖書から見てみましょう。

そしてイエスは、杯を取り、感謝をささげて後、言われた。「これを取って、互いに分けて飲みなさい。あなたがたに言いますが、今から、神の国が来る時までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」それから、パンを取り、感謝をささげてから、裂いて、弟子たちに与えて言われた。

「これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれを行ないなさい。食事の後、杯も同じようにして言われた。

「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。」

(ルカ22:17~20)

全国の集会の礼拝が、もっともっと主によって喜ばれるものとなるために、ただ主イエス様だけに捧げられるようにと祈りましょう。

主は生きておられる第8集 P9~12 から抜粋

全国の集会の礼拝が主に喜ばれ、イエス様だけに捧げられるように、ベック兄が書かれた「まことの礼拝」について、主は生きておられる第8集より引用しました。→「**まことの礼拝**」
お読みいただき、祈っていきましょう。